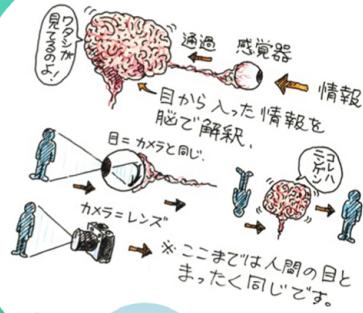


美術館って?
どんなところ



|見る|しくみ
再確認!

リアス・アーク美術館収蔵作品による

新たな船出展

2018

7.7土▶8.26日

美術再発見!

一目でわかるのになぜ描けない?



ジャガイモ 石のジャガ
粘土ジャガ
ひと目でわかるのに!?

美術つて
おもしろいの?



作家は何を
伝えようと
しているの?



芸術員つて
何者なの?



リアス・アーク美術館
RIAS ARK MUSEUM OF ART

■はじめに：《リアス・アーク美術館収蔵作品による「新たな船出～美術再発見」展について

リアス・アーク美術館、収蔵美術作品による本コレクション展は、単に美術作品を鑑賞するだけではなく、改めて美術・美術館の面白さ、興味深さ、社会的な必要性、役割などを知る機会を提供しようとする展覧会です。本展では近代洋画作品、戦後現代美術作品（平面／立体）を中心とした美術作品、約50点を展示します。出品作品は全て当地域所縁の作家、あるいは当館において過去に紹介した作家の手によるものです。

展示構成としては当館発行の美術普及冊子「読む美術館」を基に、美術の発生から現在に至るまでの美術表現の歴史、変遷を解説します。また現代における美術、美術家の社会的役割、美術館の社会的役割などを解説します。さらに、そういった解説を通して、美術作品の見方、楽しみ方を知ることのできる機会とします。

▶本資料について：

この資料発行の目的は有意義な美術館利用、美術に対するより深い理解と楽しみを得られるよう、必要な知識や概念を分かりやすく提供することにあります。「見る・感じる・考える・表現する」とこと、「美術とは何か」、といった美術に関する基本的な解説と、「美術館とは何か」「美術館を楽しむために」といった美術館（博物館）全般に関する解説を掲載しています。美術、美術館をより深く理解するための入門資料としてご活用下さい。

■ I. 「見る・感じる・考える・表現する」とは？

▶①見るということ：

私たちは普段、自分を取り巻く世界を目で見てています。同じく音は耳で聞いています。臭いは鼻で、味は口で、といったように、それぞれの感覚器を使って様々な情報を感じ取っています。確かに、ものを見る感覚器官は目で間違ひありません。しかし、はたして目の前にある何かは、彼にも、彼女にも、私にも同じに見えているのでしょうか？ その答えは、たぶん「NO！」です。

▶ものを見る仕組み：

さて質問です。「風を見たことはありますか？」

おそらくこの質問に対する答えは2つ考えられます。1つは「風は無色透明な空気の動きなので、目には見えない。だから見たことがない。」という答え。もう1つは「雲が流れる、草木が揺れるなどの現象から風を見ている。だから見たことがある。窓の外を目で見て、風が吹いているかどうか判断しているということは、風は見えるということ。」というような論理的な答え。

確かに、風そのものは無色透明な空気の動きなので、視覚的には認識不可能かもしれません。ということで見えないから見たことがないという答えは間違っていません。しかし、水田を渡る風が稲の葉を揺らす様子を目にすれば、私たちは「風を見た」と認識し、「揺れる稲の葉を見た」とは認識していないはずです。つまり、風は目に見えるという答えも間違っていません。仮に「防風」というタイトルが付けられた絵画があったとして、その画面にちぎれ飛びそうにひしゃげ乱れる木々が描かれているとすれば、「風を描いていない」と考える人はまずいないでしょう。

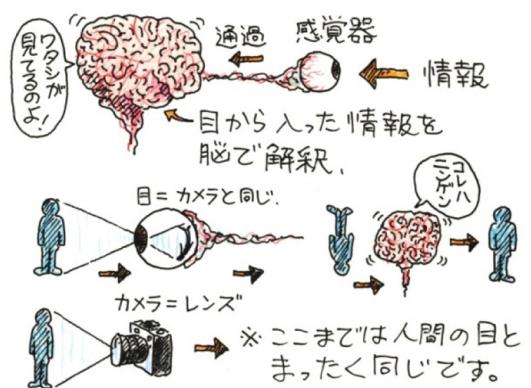
ということで、風が見えるかどうかという問いには、2つの真逆の答えが存在します。実はそのような矛盾はものを見る仕組みから生じています。一般にものを見るということは、目で見ることを意味します。しかし、正確な言い方をするならば、目は感覚器として光を感じるだけで、「ものを見る」という行為は脳で行われています。

目には光を取り込むレンズが備わっており、そのレンズから取り込まれた光はデジタルカメラのイメージセンサー、フィルムカメラのフィルムに相当する網膜に映し出され、その刺激が視神経によって脳に伝えられて視覚となります。視覚とは光を感じることではありますが、「ものを見る」ということまでは意味していません。ものを見るという行為はさらにその先、視覚されたものごとを脳が認識し、思考することで意味を見出して始めて完了します。つまり、目では見えていても、思考による意味の認識が得られなければものは見えないとということです。

風が見えるかという問い合わせへの2つの答えは、視覚可能か？ 認識可能か？ という2つの意味に解釈でき、そのそれぞれの意味に対する解釈の違いから真逆の答えが生じています。見えないという答えの場合、単純に視覚できないとの意味になります。一方、見えるという答えでは、直接的に視覚できていなくても状況から認識可能であることを意味しています。

さて、ここで改めて見るということなののかを整理します。少なくとも、美術的な意味から「ものを見る」ということの定義をするならば、それは視覚するという意味ではありません。美術的意味において「ものを見る」とは「思考による認識」を意味します。つまり、風は見える、ゆえに描くことも、造形することもできるということです。風鈴は風を音に変換します。逆説的に、風鈴が音を出すということは風が吹いていることを意味します。同じように、風による影響を受けたものの様子を描く、あるいは造形することで、風は視覚認識可能なものになります。

私たちは幼児期から自分自身を取り巻く世界（環境＝自分以外の全て）を視覚し、視覚されたものに意味を添え、より認識しやすい概念に置き換えることで記憶します。その記憶の積み重ねによって視覚されたものが何であるのかを判断しています。つまり、見知っているものであれば、それが何であるかを瞬時に判断できますが、初めて見るものについては、それを視覚できても認識はできません。また、日常的に目にしているものだとしても、それが何であるのか認識し、記憶しておかなければ思い出すことさえできません。「ものを見る」とはそういうことなのです。



►②「感じる・考える」ということ：

「感じる」とは、体外、体内からの刺激を、感覚器官を通して受け取ることや、感情を抱くことを意味します。私たちは目、耳、鼻、口、皮膚などによって体の内外からの刺激を感じ取ります。それらを感覚と言います。また、感覚をきっかけとして記憶などを思い起こす過程を知覚と言います。

一般的な認識としては、感覚が知覚されるまでを「感じる」と表現します。そしてその次の段階、つまり「感じた物事が具体的に何であるかを意識すること」を「認知」と表現します。

大人の場合、美術作品、芸術作品には一見しただけではわからない、何か特別な意味が含まれていることを経験的につけています。そのため「感じたことを」と問われても、ついつい意味を考えてしまします。つまり、感じるのではなく考えてしまうということです。「考える」とは知識や経験などに基づいて、筋道を立てて頭を動かすこと、知的に分析することであり、「感じる」ということとは意味が違います。ですから、意味が解らない理由は「感性が乏しいから」ではありません。単に知的に分析するための情報が不足しているだけです。ということは、情報さえ得られれば「意味」は理解できます。ただし、理解したいという好奇心がなければ芸術作品は「理解できない」存在のままでです。

さて、どう感じるか、ということは個人の主観ですので、どのように感じてもそれは自由です。つまり、好き、嫌いは自由です。一方、どう考えるか、ということは客観的な情報を基にする行為ですので、個人の自由ということとは違います。ということで芸術作品の価値をどう考えるか、という問いに対しては、個人的な感覚としての好き、嫌い、つまり「どう感じるか」とは無関係に、人類に対する文化的価値、知的財産としての価値をどのように考え方判断するのか、という答えが必要になります。



►③表現するということ：

感じたことを知覚し、認知し、論理的な思考回路に乗せて表現まで持つて行く力、その能力を想像力と言います。人は誰もが何かを感じ、そして何かを考えます。そしてさらに感じたことや考えたことを、想像力を駆使して表現します。

例えば、夕暮れ時、あなたが地平線に沈みゆく夕陽を見たとします。その時、あなたは深い悲しみを覚え、とめどなく涙を流しました。なぜならば、その日、あなたは大切な人の別れを経験したからです。あなたはその思いを表現するために、その風景を絵に描くことにしました。地平線に沈みゆく夕陽を描いた夕暮れの風景画です。

あなたは完成した絵を友人に見せます。すると友人は「きれいで素敵な夕焼けの絵だね、明日への希望を感じるよ、いい絵だね」との感想を口にします。思わずあなたは、いや、そういうつもりで描いたのではなく…、と絵に込めた思いを説明します。すると友人は「ふうーん…、そうだったんだ、ごめんね」と言います。そして気まずい雰囲気になってしまいました。

さて、これはいったいどういうことでしょうか。あなたが表現したはずの想いは、友人には全く理解されていません。つまり、残念ながらあなたの表現は上手くいっていなかったということです。

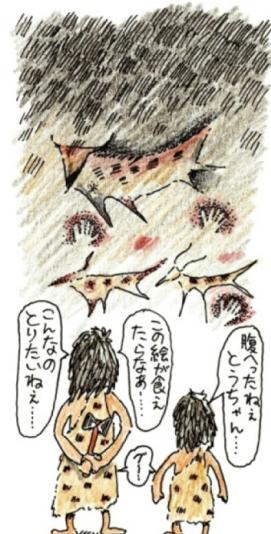
同じ日、同じ時間、同じ場所で同じ夕焼けを目にしてしても、その感じ方は個人によって様々です。風景はただそこに、自然に存在しているだけで人の感情を代弁、表現しているわけ

ではありません。ということはその風景を客観的に表現したとしても、そこに喜びや悲しみなどの感情、感覚が表現されることはありません。したがってその絵を目にした人たちは、実際の夕焼けを見たときと同じように、各自、様々な感じ方をすることになります。

もしも悲しみを覚える夕焼けの風景を表現するのであれば、なぜ沈みゆく夕陽に悲しみを覚えるのか、どうすれば夕陽を見て悲しいと感じるのか、その理由を追求し、見ただけで「悲しい夕暮れだ」と誰もが感じられる絵を描かなければなりません。それはとても難しいことです。



この例の場合、「あなた」が夕日を見て涙を流した理由は「大切な人を失ったから」であり、なぜ沈みゆく夕日が感情を高ぶらせたのかと言えば、命が尽きるイメージ、終わりのイメージ、闇が訪れるイメージなど、沈む、消える太陽の姿と、別れや死などのイメージが重なってしまったからと言えます。だとすれば、客観的に夕焼けを描くだけではなく、「尽きる、消える、終わる、闇、死」などを感じさせるような何かを絵の要素として組み込む必要があります。そうすれば「悲しい夕暮れ」を表現することができるはずです。



■ II. 美術について：

►①美術とは何か？（原始から現在）：►美術作品との出会い：

人は狩猟採集の生活をしていた時代から美術的（今日的な見方をすれば）な表現を行ってきました。それらの表現は主に人間の素朴な「願望」を目に入れる形に表したものだったと考えられています。例えば、フランス・ラスコーの洞窟壁画。大きな牛や鹿など大物を捕獲したいという狩猟生活の願望や、不獣が続いたときの祈りとして描かれたものと解釈されています。また精神的な思想を表現したものとして、様々な宗教的、呪術的な表現があります。例えば、オーストラリアの先住民アボリジニの壁画、ネイティブアメリカンの壁画、日本の土偶などがそのように考えられます。その他に民族の歴史や文化を記録するための様々な表現もあります。エジプト、インカ、アステカなどの遺跡に見られる絵文字や絵画、彫刻表現などがその例と言えます。

さて、人ははるか昔から様々な造形表現を行ってきていますが、それらを「作品」と呼ぶようになったのは実はずいぶん最近のことです。美術表現は 300 年ほど前から少しづつ姿を変え、私たちが現在目にするような表現に至っています。それ以前の美術は、というと「職人の仕事」で、いわゆる一つの「技術」でした。

かつて美術家（技術者）は時の権力者と深く結びついていました。写真もない時代には例えば肖像画や彫刻として自分の姿を残そうとする権力者が、お気に入りの美術家を召抱えていました。また様々な宗教においてその宗教觀を絵画や彫刻とし、広く一般に普及する役割を担っていたのも美術家です。



かつて宗教は国政を左右する非常に重要な位置づけがなされており、そのための表現を請け負う美術家もまた特別な存在とされていました。ですから美術家の社会的地位は現在とは全く違う意味で非常に高いものでした。ミケランジェロ（1475～1564／イタリア）などはそのよい例と言えます。

しかしそのような権力との関係は様々な革命などによって時代の変化とともに失われていきます。絶対君主制の廃止や民主化、政教分離の考えが美術家の社会的立ち位置と役割を変化させました。それまで権力者によって擁護（パトロン制）されていた美術家は、実質的に職、社会的地位、社会的役割を失うことになりました。

一方で、それまで一部の上流階級のステータスシンボルだった美術が、広く一般化されることになりました。「自分の家にも絵がほしい」「自分の肖像画を残したい」といった庶民からの需要が生まれ、美術は少しずつ庶民の生活の中に浸透していきました。美術家たちはそういう需要を頼りに生活するようになります。それまで雇い主の好みに答えることが義務付けられていた美術家は、束縛から解放されたことで、自由な表現ができるようになりました。また生活の安定よりも自分の表現を追及したいと願う多くの美術家たちがやがて「作家」となり、初めて今日的な意味における「美術作品」が誕生することになりました。

▶日本の場合：

ここまで話は主に西洋の歴史ですが、日本の場合も同様で、近代まで日本の美術家はほとんどが職業画家で、今日的な作家という概念ではありませんでした。代表的な人物として葛飾北斎（1760～1849／日本）なども、「絵師」と呼ばれる職業画家でした。特に日本画の世界では何百年という間築き上げられてきた文化的背景があり、制作は主に注文制でした。（現在でもその習慣は残っています。）

戦前の美術教育では絵手本をひたすら模写することが当たり前でした。これは優れた表現を体で覚え継承していくことに重点が置かれていた日本画の歴史の名残です。徒弟制だった絵師の世界で「個性」は必要とされていませんでした。しかしそれでも、戦前からごく一部の美術家が、西洋美術を学ぶ中で、西洋の「美術作品」「作家＝アーティスト」という考え方方に触発され、表現の自由に目覚めていったことも事実です。

さて、美術の歴史を簡単に説明してきましたが、つまり、現在当たり前に使っている「美術作品」という表現自体が、実は非常に新しい考え方で、正直に言うとまだ定着すらしていない概念なのだと思います。

現在、かつてのように誰かに注文されて「作品」を作っている「作家」はまれです。もしかするとそういう人を現在では「作家」とは呼ばないかもしれません。作家、つまりアーティストは誰かに注文されるのではなく、社会にとって必要だと自分が考えるテーマを表現する人のことを意味します。また人類全体に向けて表現されたものを「作品」と呼んでいるのです。

目に見えにくいものや、気づきにくい事柄を一般化するための表現方法が美術であることは、はるか昔から変わっていません。ただ非常に個人的に狭い世界で表現、鑑賞されていた事柄が、全世界に向けられた表現へと拡大してきたということです。

では「美術作品と出会い」とはどういうことなのでしょう？

美術作品を単に「物」だと思ってはいけません。美術作品は「物」を媒体にして「意味」を伝えようとする表現手段です。それは文字表現と同じです。本を読むときに、文字の形や並び方などを見るだけで内容を無視するということはありません。美術作品も同じように作品によって何を語ろうとしているのか、内容を読み取ることが大切です。内容に触れることが「出会い」であって、それは「表面だけをただ見る」事とは大きく異なります。「出会い」とはその先の深い関係を意味する言葉です。美術作品「アート」と出会うということは、その先の人生が変わっていくことを意味します。



▶②美術、美術家の社会的役割：

かつて美術には明確な社会的役割が備わっていました。宗教や権力が美術を利用していた時代にあってはそれらと共に同等の社会的役割を美術は果たしていました。しかし時代の変化とともにそれらから分離した美術は、同時に社会的役割においても大きく変化することになりました。

表現の自由を得た美術は「作家＝アーティスト」を誕生させました。作家たちは自分自身の人生から感じる様々な人間的課題をそれぞれに見出し、独自の方法を探しながら美術表現してきました。特に19世紀から20世紀にかけて美術はそれまでの定義を大きく変えてきました。それまでの「いかにしてありのままの現実、自然を表現するか」という姿勢が方向性を変え、「いかにして人間にとての現実、感じる世界を表現するか」という命題の追求が表現の主役になっていきました。そしてその表現は2度の大きな戦争を経験したことで、「新たな価値観を構築する必要性」に強く迫られ、結果、どんどん抽象化されていきました。

例えば、目の前に花があるとして、その花をどのように感じ、どのように認識するかということは文化的な背景によっても、個人的感覚によっても大きく異なってきます。1000人が見て1000通りの解釈があるとは言いませんが、10通り程度の幅は生じるものでしょう。そしてその内訳を見れば、大多数の人は同じ解釈をし、一部の限られた人々が様々な解釈をするものです。つまり一般的、常識的解釈と個性的な解釈が生じます。

多くの場合、美術家は少数派に属しています。一般の人が発見しないような切り口で物事を捉え、独特の価値観を表現してみせます。そしてその独特的な解釈がこれまでの一般常識を覆してきた歴史がたくさんあります。現在の美術が担っている社会的役割は、そのように「定着してしまっている人間の価値観」をあらためて見つめ、新しい価値、より発展した価値観を築き上げていくために必要な「思考の進化」を提供することにあります。そしてそのような役割は、これから先も変わることなく担われていくことでしょう。



►③美術家（アーティスト）とは何者か？：

かつての職人的役割から開放され、表現の自由を獲得した美術家は、様々な時代や社会の中で多くの芸術活動を開拓し、様々な価値観を提案してきました。

人類の歴史上、何度も繰り返されてきた過ち、「戦争」は多くの場合、価値観や思想のずれ、人間の欲望によって引き起こされてきました。たいていの場合、参加している人間の全てが戦争を望んでいるわけではありません。そして多くの場合、戦争を望まなかった人々が犠牲になってきました。美術家を始めとする多くの芸術家（アーティスト）は過ちを正し、争いを阻止するために、時には自らの命を懸けて作品を生み出してきました。芸術家たちは人類の未来を豊かにしたいと願い、そのために必要な意識や思想を表現し、世に問いかけてきました。



④キュビズムの基本的な考え方

一般的な絵の場合



ピカソ（1881～1973／スペイン）という作家はキュビズムの作品で知られる世界的巨匠です。キュビズムとは、それまで固定された1点から物を見て描写していた考えを捨て、人間が物事を認識する際に行う自然な行為としての多視点的視覚認識による絵画表現を確立しようとした考え方であり、人間の身体を絶対としたその姿勢は表現の自由を確立する上で美術史上に大きな足跡を刻んだだけでなく、多様な視座から物事を解釈することの大切さ、価値観の多様さを改めて世に示した偉大な業績と言えます。

そのピカソの代表作で、「格尔ニカ」という作品があります。戦争によって破壊されていく祖国、故郷を愁い、制作された巨大な作品は、人類の宝とされ後の世の多くの人々に戦争の忌まわしさ、愚かさを伝えています。



アーティストは常に人類全体に関わる問題を深く考え、その思いを作品に込めます。実はそういった優れた作品が世界中にたくさん存在していますが、その思いはなかなか伝わりません。「格尔ニカ」が発表された後も、現在まで戦争はなくなっています。

今日的問題として考えなければならないことは、美術が担うそのような役割に対して、きちんとした必要性を社会全体が認識できていないことです。作家の行為は個人的で独りよがりなものと捉えられるか、現実離れた別世界の言動、「変人」として扱われてしまうことも少なくありません。

作家が問いかけることを社会がきちんと受け止め、同じ視点で深く考えるようにならなければ、美術は社会にとって不要なものと判断されかねません。これから先、美術家による表現はますます深さを増し、今以上に「社会における少数意見」になっていくことでしょう。しかし人間の歴史は多くの場合少数の意見が積み重ねてきたものです。



■Ⅲ.美術館について：►①美術館とは何か？：

さて、あなたは「美術館ってなんですか？」という質問に「美術館とは〇〇です！」と自信を持って明確に答えられるでしょうか。

実は、厳密に言うと美術館は「美術博物館」です。では博物館とは何でしょう。まずは博物館についてその定義を確認しておきます。

博物館には色々な種類があります。歴史博物館、科学博物館、民俗博物館など。実は動物園も博物館です。そして美術館は「美術博物館」で、略して「美術館」と呼ばれています。

博物館が「博物館」であるためには色々な定義を満たしていかなければなりません。その定義は国際的な基準を基に国ごとに定められています。



►博物館の定義とは：

►国際的な基準：

国際博物館協会（イコム）という組織による博物館の定義があり、これが世界各国の博物館を設置、管理運営する上での基本的な考え方になっています。以下はその内容です。

『博物館とは、社会とその発展に貢献するため、研究・教育および楽しみの目的で、人間とその環境に関する物的資料を収集、保存、研究し、これを伝達、展示する、人々のために開かれた非営利の恒久的機関である。』



►日本の基準：

日本では社会教育法の中で、博物館法という法律が整備されており、この法律に定められた定義に則って博物館は設置、管理運営されています。以下はその内容です。

『「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（社会教育法による公民館及び図書館を除く）のうち、地方公共団体、民法第三十四条の法人、宗教法人、または政令で定めるその他の法人が設置するもので規定による登録を受けたものをいう。』

日本の定義は内容が細かく、やや難しい感じがしますが内容的には国際的な基準と同じことを語っています。美術館も美術博物館として、これらの定義に則って設置、管理運営されています。

▶博物館と文化施設の違い：

現在、リアス・アーク美術館は登録上、博物館相当施設と分類されています。博物館と博物館相当施設は、博物館法に定められるところの教育施設で、公立館の場合は町の教育委員会が管轄する教育施設になります。

一方、博物館のように展覧会やイベントなどを行っている施設で「博物館類似施設」「文化施設」と呼ばれるものがあります。この2つは分類上、教育施設ではありません。一般的には博物館や美術館と混同されていますが、実は全く別なものです。博物館、美術館は教育施設ですので「生きていく上で必要なこと、大切なこと、伝えるべきことを提示する、教える、あるいは学ぶ場」です。ですから、博物館では展示などもそのような教育的使命を果たすために編集、構成されます。他方、教育施設ではない「文化施設」や「類似施設」にはそのような使命も責任も本来的には求められていません。そのため娯楽、観光施設的な要素が強化される傾向が見られます。

一般的な感覚で言えば、学校は学ぶ場所、遊園地は楽しむ場所、この2つが同じではないことは理解できることだと思います。博物館、美術館は「学びを楽しむ場所」、文化施設は「余暇を楽しむ場所」、施設の目的が違うということです。

▶では美術館とは何なのか？：

美術館（博物館）は楽しみのためだけにあるのではなく学習の場であり、人類共通の財産を収集し、保存研究をする場所です。そして大切なことはその時の思いつきでつくる施設ではなく、非営利の恒久的な施設であるということです。

美術館は美術博物館ですから美術品や美術に関する様々な資料を収集し保存、研究します。そしてそれらの成果を定期的に展覧会として地域住民等の利用者に還元します。美術作品には様々な時代や文化を背景として、その時々に人間が考えた事柄が表現されています。そこに表現されていることは時代や文化を越え、人類共通の財産となりうる力を持っています。また共通でないとしても人類という多様な生物が持つ複雑な文化的差異（違い）や時代による社会通念（常識）の変化などを学び、未来を考える助けになる可能性も持っています。そういうものを「知的財産」といいます。美術作品は単なる「物」ではなくそのような人間にとて大切な知的財産なのです。ですから美術館は単に物を収集、保存、研究しているのではなく、過去～現在～未来という大きな時間の流れをつなぐ重要な場所なのです。

▶ついでに、学芸員とは何者か：

博物館が博物館と名乗る上で絶対に必要な職員が学芸員です。学芸員はどのような博物館にも必ずいて、資料の収集、保存、研究、伝達という博物館の基本となる仕事を具体的に行っている人で、学芸員資格（国家資格）を有する専門家です。美術館の場合、学芸員は美術の専門家で、もちろん作品を作ることから美術の歴史、美術教育、展示学など美術に関する様々な知識と経験を持っています。

具体的な仕事としては様々な作家と会ってその考え方をまとめたり、作品を分析（材料や技法、歴史的背景など）して資料を作ったり、そういうものをもとにして展覧会を企画し、その内容を一般の人に伝えたり、また美術に関する様々な質問などに答えることや、色々な技術を教えること、収蔵作品が傷まないように保存管理することなど、様々な仕事をしています。基本的には研究者という事になっていますが、その研究内容をいかに分かりやすく、面白く伝えることができるかということを考えなければなりませんので、そういう意味では表現者でもあります。

ものをつくる、表現するということに関して専門的な知識、経験を持つ学芸員は、そういった能力を美術館、博物館以外でも発揮できます。例えば何かのイベント開催や、もっと大きな、例えば「まちづくり」といったような活動においても、その専門性を発揮するはずです。

▶②リアス・アーク美術館は何を行ってきたのか：

ある時代まで、あるいはある時代において文化的に定着し、広く普及していた物事があり、それがその後の文化に大きな影響を及ぼしているというような歴史的、時系列的事実があれば、その価値は「保管、研究されるべき文化的価値を持っている」と判断されます。そのような文化的価値を見出された物事だからこそ、博物館はそれらを遺し、現在の日常的な文化との関連性などを、教育施設として一般に知らしめる努力を行います。

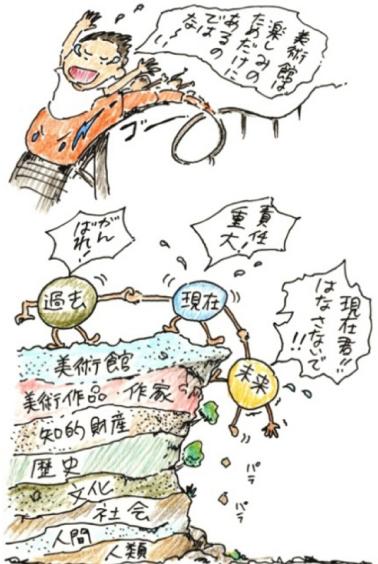
「歴史は繰り返される」という考え方があるように、一旦、日常的な必要性が途絶えた事柄であっても、時代の巡り会わせて再びその文化的価値が見直され、必要性が生じるといったことは起こりうることです。そういう状況を想定して、博物館は資料を保管しているとも言えるかもしれません。

一般的に考えて、美術館とはどのような場所か？ と問われれば「美術作品を楽しむ場所」という答えが大多数を占めるはずです。しかし、実は「美術館＝美術作品を楽しむ場所」という回答は間違いとは言えませんが、厳密に言

えば解答としてはかなり不十分と言わなければなりません。

リアス・アーク美術館では、様々な資料によって①「気仙沼、本吉地域がどのような場所なのかを伝えよう」としています。様々な資料とは、歴史、民俗、生活文化、美術、芸術など多分野の資料です。そして②「日常的な必要性が感じられなくなってしまったような物事でも、気仙沼、本吉地域で生きる者が、いつの日かまた必要とする可能性のある物事を保管」しています。さらに、③「いま必要とされていても、今後、その必要性が忘れられてしまう可能性のある物事を保管、展示し忘れられないように伝える」ことをしています。そして④「現在を生きている人々が、何を感じ、何を考え、何をしていたのか、何をしようとしていたのか、といったことを記録し、未来に残す活動」もしています。それから⑤「この地域で暮らす皆さんにとって、生きていく上で知っていたほうが良い事、知っておくべき事を学ぶための機会と場所を提供」しています。

実は、リアス・アーク美術館が行っている①～⑤のことは、美術館、博物館に与えられた社会的役割です。違う言い方をするなら、そのような役割をはたすために美術館、博物館は存在しています。



►③美術館を楽しむために：►「知っておきたい！ 世界共通のルールとマナーについて」

▶基本的なルール：

- ①館内に危険物（発火、爆発したりするもの、溶剤などの薬品）を持ち込まないこと！
- ②先のとがった長いもの、例えば傘などを展示室に持ちこまないこと！
- ③水気のあるもの（例えばジュース、泥だらけの靴なども）を展示室に持ち込まないこと！
- ④展示室内で飲食をしないこと！ ⑤酔った状態で入室しないこと！
- ⑥鉛筆以外（インク式のペンなど）は展示室で使用しないこと！
- ⑦フラッシュを使わないこと！（写真撮影自体がほとんどの場合禁止されています。）
- ⑧作品に触らないこと！手で触らなければよいということではありません。
(許可されている場合を除きます。)
- ⑨必要以上に作品に近づかないこと！危険と判断されれば触れていなくても注意を受けます。
(45cmくらいが限界です。それ以上近づかないこと！)
- ⑩息を吹きかけて作品を動かしたりしないこと！（唾液が飛んだりします。）
- ⑪作品が置かれている展示台などにも触らないこと！



▶基本的なマナー：

- ①館内で大声を出さないこと！ 展示室以外でも気をつけましょう。
- ②館内で走り回ったり暴れたりしないこと！
- ③展示室内で携帯電話を使用しないこと！
- ④写真撮影など許可無く行わないこと！
- ⑤その他職員の指示に従うこと！

※これらのマナーは公共の空間であればどこででも当然考えなければならない当たり前のことばかりです。美術館だけが特別なわけではありません。

►「展覧会を楽しむ方法」：

▶基本編：

あなたは展覧会を見に行ったとき、一番最初に何を見ますか？ 人によっていろいろだと思いますが、やはり、まずは作品を純粋に見ることが大切でしょう。色々なことを感じて、自分なりに考えてみて、それからキャプション（作品タイトルなどが書かれたプレート）を確認してみる。さらに解説文などを読んでみて作家の人物像を想像しながら、作家が何を表現しようとしているのか、見る人に何を考えて欲しいのか自分の考えと照らし合わせながら心の中で会話してみましょう。そしてさらに、そのような作品や作家をなぜ美術館が見せようとしているのか、展覧会そのものの趣旨について考えてみましょう。

つまり展覧会を見る場合、作品ひとつひとつが好きか嫌いか、きれいかそうでないかということを感じ的に捉えるだけではなく、展示している全ての作品を通して考えられていること、伝えようとしている内容を読み取ることが大切です。時間をかけて作品を読み解き、展覧会全体が語ろうとしていることを理解すれば、これまで以上の発見が得られるはずです。

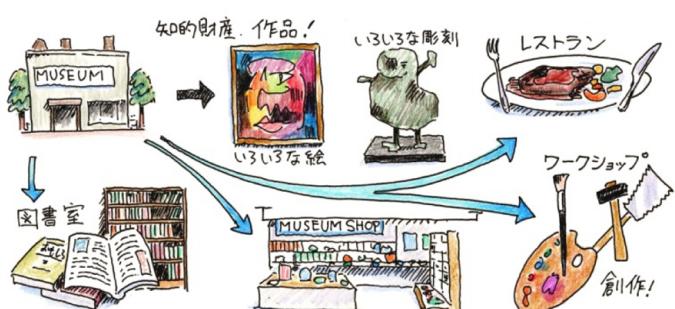


▶応用編：

さて、自分なりに展覧会や作品が理解できたら、その展覧会を企画した学芸員に話を聞いてみることもよい勉強になります。その場合ただ単に「教えて下さい」という姿勢にならず、「私はこんな風に考えたのですが」という自分の考えを自ら表現することが大切です。そうすれば次々に会話が弾んでいくことでしょう。また誰かと一緒に展覧会を見たなら、その人とお互いの考えを語り合うこともよいでしょう。いずれにしても大切なことは自分が作品や展覧会を見てどう考えたのかを表現することです。実は、鑑賞と表現は表裏一体なのです。

▶展示室以外の魅力：

美術館には展示室以外にもいろいろな楽しみがあります。例えばミュージアムショップ。そこでしか手に入らないような面白いものが売っていたりします。レストランを利用するというのも良いかもしれません。またどこの美術館でもそうとは限りませんが、ワークショップ（創作工房）を利用して自分で作品を作ること、美術関係の本がたくさんある図書室を利用するなど、色々な楽しみがあります。またスペースを借りて自分自身が展覧会をすることも可能です。



■IV.おわりに：

さて、美術、美術館について、思いこみだけで実は知らなかったこと、たくさんあったのではないか？ 美術館という場所は様々なことができ、色々なことを考えられ、そして人生をより豊かにする多くのヒントがもらえる場所です。人類の先輩たちが残してきた「知的財産」と出会う場所、美術館へ！ さあ、みんなで出かけましょう！ そして、皆さん的人生をもっともっと豊かなものにしていきましょう！

■リアス・アーク美術館収蔵美術作品について：

リアス・アーク美術館は平成6年の開館以来、現代美術を中心に数多くの美術展を開催してきました。物故作家ではなく若手作家を中心に美術界との関係を構築してきたことにより、現在リアス・アーク美術館は多くの作家と良好な関係を維持しています。そのような関係性を基礎にする当館には、現代美術作品を中心に各作家から美術作品が寄託、寄贈されています。

現在、当館に収蔵されている美術作品は、基本的には当館で過去に企画展等を行った作家によるものであり、その作品群からはリアス・アーク美術館の研究方針、教育方針、企画方針などが垣間見えるものとなっています。また、開館以来継続してきた圏域在住、児童、生徒による絵画作品公募展入賞作品や近年、気仙沼市立図書館から移管された作品群なども加えることで、当地域の美術的背景を捉えることも可能なコレクションです。

■参考文献：『読む美術館』 リアス・アーク美術館 2006

■掲載テキスト／イラスト：山内宏泰（リアス・アーク美術館学芸員）

■リアス・アーク美術館平成30年度企画事業 平成30年7月7日（土）～8月26日（日）

《リアス・アーク美術館収蔵作品による「新たな船出～美術再発見」》展

●主催：リアス・アーク美術館 ●後援：気仙沼市／南三陸町／気仙沼市教育委員会／南三陸町教育委員会／
気仙沼・本吉地区文化協会連絡協議会／三陸新報社／河北新報社／気仙沼ケーブルネットワーク株式会社

●お問い合わせ：リアス・アーク美術館 ☎988-0171 宮城県気仙沼市赤岩牧沢138-5 Tel: 0226-24-1611

●編集・発行：リアス・アーク美術館 2018年7月7日 ※本冊子に掲載されている図版等の無断複製を固く禁じます。